2007年10月作成（第１版）

日本標準商品分類番号
876429

広域駆虫剤

コンバントリン®錠

COMBANTRIN® TABLETS

ピランテルパモ酸塩

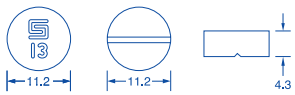
処方せん医薬品：
注意－医師等の処方せんにより使用すること

貯　　法：しゃ光・室温保存
使用期限：外箱に記載

承認番号	14800AMZ00443000
薬価収載	1974年２月
販売開始	2007年11月
国際誕生	1970年９月

【禁忌】（次の患者には投与しないこと）
(1)本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者
(2)ピペラジン系駆虫薬を投与中の患者（「相互作用」の項参照）

【組成・性状】

販　売　名	コンバントリン錠
成分・分量［１錠中］	日局 ピランテルパモ酸塩をピランテルとして100mg
外形・大きさ（mm）	
色／剤形／識別コード	淡黄色／素錠／5 13
添　加　物	アルギン酸、トウモロコシデンプン、ラウリル硫酸ナトリウム、ステアリン酸マグネシウム

【効能・効果】

回虫、鉤虫、蟯虫、東洋毛様線虫の駆除

【用法・用量】

通常体重１kg当りピランテルとして10mgを１回経口投与する。

体重換算による服用量の概算は、次表の通りである。

体　重	20kg	30kg	40kg	50kg以上
服用量	２錠	３錠	４錠	５錠

本剤は食事に関係なく投与することができ、また下剤を使用する必要はない。
なお、投与は１回のみである。

【使用上の注意】

１．相互作用

併用禁忌（併用しないこと）

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
ピペラジン系駆虫薬	両剤の駆虫作用が減弱するおそれがある。	両剤の駆虫作用が拮抗したとの報告がある[1]。

２．副作用[2]

総症例9,544例中372例（3.90%）に副作用が認められ、その主なものは腹痛（1.34%）、頭痛（1.17%）、悪心・嘔吐（1.16%）等であった。（副作用調査終了時）
次のような副作用が認められた場合には、必要に応じ、減量、投与中止等の適切な処置を行うこと。

種類＼頻度	１%以上又は頻度不明	0.1～１%未満	0.1%未満
精神・神経系	頭痛、嗜眠*1、不眠*1	めまい	
消化器	腹痛、悪心・嘔吐	下痢、食欲不振	
肝臓	AST(GOT)の上昇*2		
過敏症*3	瘙痒*1、蕁麻疹*1		発疹
その他	冷汗*1、多汗*1	倦怠感	

＊１：文献報告又は外国での報告のため頻度不明。
＊２：肝障害のある患者には慎重に投与すること（少数例に一過性の軽微なAST(GOT)上昇の報告がある。文献報告のため頻度不明。）。
＊３：発現した場合には投与を中止すること。

３．高齢者への投与

一般に高齢者では生理機能が低下しているので減量するなど注意すること。

４．妊婦、産婦、授乳婦等への投与

妊娠中の投与に関する安全性は確立していないので、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には、治療上の有益性が危険性を上まわると判断される場合にのみ投与すること。

５．小児等への投与

２歳未満の乳・小児に対する安全性は確立していないので、２歳未満の乳・小児に投与する場合には、慎重に投与すること。

６．適用上の注意

薬剤交付時：PTP包装の薬剤はPTPシートから取り出して服用するよう指導すること（PTPシートの誤飲により、硬い鋭角部が食道粘膜へ刺入し、更には穿孔をおこして縦隔洞炎等の重篤な合併症を併発することが報告されている）。

【薬物動態】

健常成人５例にピランテルパモ酸塩500mg（ピランテルとして）を経口投与した場合、糞中には４例で60～65%、１例で93%の排泄率を示し、尿中には全例とも１～３%の排泄率を示し、いずれもその大部分が48時間以内に排泄された[3]。
経口投与した場合、３時間後に血中にピランテル関連物質として0.2～1.1μg/mLが検出されたが、そのほとんどは代謝物と考えられ、５時間以内にほぼ消失した[4]〔[4]は外国人データ：参考〕。

【臨床成績】

本剤の各種寄生虫症に対する臨床試験の成績は次表の通りである。

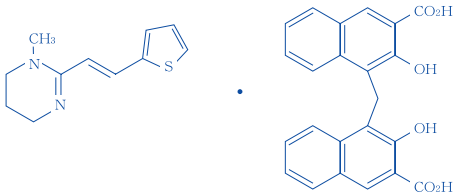
寄生虫別疾患名		陰転率
蟯虫症[5~8]		90.8%（177/195）
回虫症[9~11]		93.7%（252/269）
鉤虫症	ズビニ鉤虫[12,13]	97.4%（ 37/ 38）
	アメリカ鉤虫[14~16]	78.7%（207/263）
東洋毛様線虫症[17]		93.3%（ 83/ 89）

【薬効薬理】

ピランテルパモ酸塩は、イヌ回虫あるいはイヌ鉤虫による感染動物（イヌ）及びネズミ蟯虫による感染動物（マウス）のいずれに対しても、１回投与により優れた駆虫効果を示している[18~20]。
本剤の駆虫効果は、虫体の神経－筋伝達を遮断して運動麻痺を起こすことによるものと考えられている[1]。

【有効成分に関する理化学的知見】

一般名：ピランテルパモ酸塩（Pyrantel Pamoate）
化学名：1-Methyl-2-[1(*E*)-2-(thien-2-yl)vinyl]-1,4,5,6-tetrahydropyrimidine mono[4,4′-methylenebis(3-hydroxy-2-naphthoate)]
分子式：$C_{11}H_{14}N_2S \cdot C_{23}H_{16}O_6$
分子量：594.68
融　点：256～264℃（分解）
構造式：



性　状：ピランテルパモ酸塩は、淡黄色～黄色の結晶性粉末で、におい及び味はない。*N*,*N*-ジメチルホルムアミドにやや溶けにくく、メタノール又はエタノール（95）に極めて溶けにくく、水、酢酸エチル又はジエチルエーテルにほとんど溶けない。

【包　　装】

コンバントリン錠：30錠（PTP）

【主 要 文 献】

1）Aubry, M. L. et al.：Br. J. Pharmacol. 38：332, 1970
2）厚生省薬務局：医薬品副作用情報 No36（日本医事新報 No2871：108, 1979）
3）木村　義尚ほか：応用薬理 5(3)：347, 1971
4）社内資料
5）堀　栄太郎：寄生虫学雑誌 20(2)：142, 1971
6）社内資料
7）横川　宗雄ほか：寄生虫学雑誌 19(6)：593, 1970
8）山本　久ほか：寄生虫学雑誌 20(5)：359, 1971
9）小林　昭夫ほか：寄生虫学雑誌 19(3)：296, 1970
10）社内資料
11）石崎　達ほか：医学のあゆみ 83(2)：106, 1972
12）堀　栄太郎：寄生虫学雑誌 20(2)：87, 1971
13）社内資料
14）石崎　達ほか：寄生虫学雑誌 20(3)：164, 1971
15）横川　宗雄ほか：寄生虫学雑誌 19(3)：301, 1970
16）社内資料
17）谷　重和ほか：秋田県農村医学会雑誌 21(2)：11, 1975
18）尾崎　文雄ほか：寄生虫学雑誌 20(3)：188, 1971
19）林　滋生ほか：寄生虫学雑誌 20(3)：195, 1971
20）影井　昇ほか：寄生虫学雑誌 20(3)：222, 1971

【文献請求先】

佐藤製薬株式会社　医薬事業部
〒107-0051　東京都港区元赤坂1丁目5番27号
TEL. 03-5412-7817

製造販売元　佐藤製薬株式会社
東京都港区元赤坂1丁目5番27号